

日本の砂浜海岸におけるケシボウズタケ属

菌 *Tulostoma* の分類学的再検討

要旨

氏名：伊東永三郎，和田匠平

1. [見出し 1]

海浜植生は海岸砂丘に現れる植生であり、狭く厳しい環境であると同時に、地学的、生物学的、人的利用価値、持続可能性の観点から非常に有用であり、重要な環境である。そのような環境が近年、人口建造物の増加によって現状の傾向にあり、様々な地域で保全活動が行われている。環境を適切に保全するにはその環境を様々な観点から評価する必要があるが、現状、海浜植生に生息する菌類の生態に関する研究が少なく、菌類の観点から環境を評価することができない。海浜植生を菌類の観点から評価する際、日本全国の海浜植生に分布し、環境省や多くの都道府県でレッドリストに掲載され絶滅が危惧されているケシボウズタケ属菌 *Tulostoma* が指標として挙げられる。しかし、本属菌はその分類学的な検討が不十分であり、また DNA の塩基配列情報に基づく本属菌及びその関連群の系統・分類学的研究は日本ではなされていない。本研究では日本産の海浜性ケシボウズタケ属菌を対象に、子実体や担子胞子の形態観察、DNA の塩基配列情報に基づく系統解析を行い分類学的な再検討を行った。

本研究で用いた日本の海浜性ケシボウズタケ属菌は、その形態的特徴から大きく分けて4つの集団に分けられることが明らかとなり、系統解析でもそれが支持された。形態観察によってアバタケシボウズタケと同定された標本は系統解析では2つの系統群を形成し、それらは類縁群となった。更に、形態観察で

ナガエノホコリタケと同定された標本が、系統解析で *T. berkeleyi* と同一の単系統群を形成した。日本ではナガエノホコリタケとアラナミケシボウズタケは別種として報告がなされているが、これらについては元の標本に基づいた形態学的な分類の再検討が行われる必要がある。また日本でウネミケシボウズタケには *T. striatum* の学名が与えられていたが、新種であることが示された。そして、本研究で用いた標本の一部が *T. kotlabaе* の類縁群の新種であることが明らかとなった。上記の分類学的な再検討に加え、文献や採取地の情報から、分布や生息地の考察を行った。